

第 32 回報告 2014 年 12 月 22 日 (月)

ゲスト 井上正之助 (ラジオ関西 報道制作局 元プロデューサー)

三浦紘朗 (ラジオ関西 元アナウンサー)

テーマ 日本初の「電リク」 ラジオと共に 60 数年

主な内容

- ◎「CR 電話リクエスト」当時の音声 再現
- ◎ラジオ関西の名番組「電話リクエスト」の原型はアメリカ
- ◎リクエスト曲の電話殺到 1 日で 3000 通話のときも
- ◎エルビスやビートルズの新曲を東京より早く 洋楽のラジオ関西
- ◎電話の受付嬢は女子大生が中心 大阪 7 台 神戸 7 台でリクエスト曲受ける
- ◎井上プロデューサー 小学生からピアノでジャズ演奏
- ◎「電リク」専用『4321 番』が安否情報の窓口に 阪神淡路大震災で役立つ
- ◎最終面接で“「電リク」やりたい”と訴える 三浦アナ 入社後まず報道記者
- ◎仮眠時間惜しみ 深夜のレコード室でレコード聴きリスト作る
- ◎第 1 回民放祭番組コンクールで「電話リクエスト」が全国 2 位
- ◎感受性の強いときに聴いた音楽は人の一生を支配する
- ◎ラジオは“良い声”がいのち
- ◎変わるメディア環境の中で「中波ラジオのこれから」

司会 今年最後のメディアウォッチングの例会です。今日はダブルキャストでお話をいただくことになります。ラジオ関西のプロデューサーの井上正之助さんです。

井上氏 井上です。よろしくお願いします。

司会 それからアナウンサーの三浦紘朗さんです。

三浦氏 三浦です。よろしくお願いします。

司会 「元」と付けなかったんですが、お二人は、いまだ現役でお仕事をいらっしゃいます。井上さんに電話しますと、なかなか通じなくて、スタジオで番組を作っていたらという。それから三浦紘朗さんは、ラジオの放送以外にもいろんなところで活躍をしておられます。宝塚でも、公民館の文化活動の一環で、ディスクジョッキー風の文化講座、三浦さんのお話を聞きながら音楽を楽しむというような講座を持っておられます。

三浦氏 月1回、火曜日の午後です。

司会 ラジオ関西の「電話リクエスト」の話を中心にお話を伺うことになっていますが、まさに12月にふさわしい、今日のスピーカーであります。今からちょうど62年前のちょうどこの時期に、記念すべき「CR電話リクエスト」（CRラジオ神戸、現ラジオ関西）がクリスマス特番で始まったんだそうです。「電話リクエスト」は、最初からレギュラーであったと思い込んでいましたが、まずクリスマス特番として放送されて、以後、レギュラー化したというようなことは知られてなかったかもしれません。そもそも、この「電話リクエスト」がどういう形で、なぜ企画されて、放送されたのかというあたりをじっくり伺おうと思います。YouTubeで末広光夫さんが喋っておられる回が見つかりましたので、これをちょっと。

<「CR電話リクエスト」当時の音声 再現>

『みなさん、こんばんは。末広光夫です。音楽の題名は聞いたことがあるんだけど、メロディーが浮かんで来ない。また反対に、メロディーはよく聞くんだが、題名が思い出せないということはよくありますよね。ところでこの番組にお付き合いくださるときは、せめて題名だけはしっかりと覚えておいてください。でないと、あなたのリクエストにお応えすることは出来ませんから。さて、CRの「電話リクエスト」は皆さんの好きなジャズ、ポピュラーの曲を

電話でリクエストしますと、すぐにお応えしておかけいたします。もうすでに電話の受け付けは始まっています。電話番号は神戸7局の4321番です。今夜も素敵な曲、そして微笑ましいメッセージを添えたリクエストをお待ちいたしております』

司会 電話局番が神戸7局と言っておりましたが、それぐらいの時代ですね。「ラジオ・デイズ」という、歴代のラジオの名番組のタイトル集のCDを持っているんですが、こういうところにも、「CR電話リクエスト（ラジオ神戸）」が出ているんですね。というぐらい、非常に話題になった番組だったと思います。

これまでの例会とか聞き取りで、ラジオ・テレビのいろんな方にお話を伺ったところ、必ずしも局の中でも手を挙げて賛成されなかったという番組が、かえって名番組として歴史に残っているという例が数多く出てくるんですね。

さて、この「電リク」の場合はどうだったのでしょうか。そのあたりから、井上さんにまず“電リク物語”ということでお話を伺っていきこうと思います。「電リク」というのはどんな風な形で生まれてきたのでしょうか。

<ラジオ関西の名番組「電話リクエスト」の原型はアメリカ>

井上氏 今のお話の続きで言いますと、ラジオ関西の場合は、開局何周年というときには、必ずこの「電話リクエスト」を持ち出してきて、賑やかにやろう。そのときに、かつて出演されていた方とか著名人をお呼びしたりというようなことで、社を挙げて「電話リクエスト」には取り組んでいました。

三浦は今もアフター電話リクエストといいますか、かつて「電話リクエスト」でかかったような曲を毎週2時間、現在もやっております。今、彼と組んで、週に4時間、音楽番組を担当しています。そんなことで、今日は一緒に参加させていただきました。

「電話リクエスト」の原型はアメリカにあります。NHKを辞め、ラジオ関西に入社した高橋太一郎さんがアメリカにはこんな人気番組があるよと末広さんに話したことが下敷きになっています。

末広さんが、昭和27年の4月に始まった会社に嘱託扱いで配属されたのが5月。大阪のジーン・クルーパのコンサートを聞きに行った帰りに、神戸で活躍していたジャズ評論家油井正一さんと一緒になり、神戸に放送局が出来て、そこでジャズを選曲する係になってくれないかと頼まれて、末広さんは二つ返事で受けたと聞きました。

開局の年の6月に一度、末広さんは「電話リクエスト」の企画書を会社に提出したんですが、高橋さんが時期尚早。電話の数も少ないし、もし来なかったらどうするんだというようなことで、一応、そのときはやめることになったのです。そ

の後、シャンソンなんかの番組をやっていたある担当者が、クラシックの番組で、勝手に電話でリクエストを取って、曲をかけると、結構、反応があって、成功しているという下敷きがありました。

末広さんはクリスマスを狙っていたんだろうと思うんですが、クリスマスの直前になって、上司に「今夜、電話リクエストしてよろしいか」と図ると、時期も時期だったもんで、テストにやってみたらということで、始めたわけなんです。

従って、新聞の予告欄というのか、番組表にも何も出てなくて、その当時の会社のタイムテーブルには、下に4時間分を貼りつけて、手書きで1時から5時までというような、番組の案内表示がありました。タイムテーブルに乗せるために、手書きのものを付けたのが、結構、成功したというのか、詳しいことはご質問があったときに話します。

0時から1時までの2回目は予告を入れられたので新聞にも載りました。それで初めてレギュラー化ということになって、民間放送史には、多分、12月31日が初めての放送ということで登録されているかと思います。実際にはクリスマスの夜にやったということで、今も、クリスマスの頃の午前1時からの放送では、「電話リクエスト」の先ほどかかりました前のテーマ曲を三浦に喋ってもらって、番組で紹介しています。

また暮れには、エンディングのほうの曲「Auf Wiederseh'n Sweetheart」というレス・バクスターの曲を、またかけようかと思っております。そんな事情で、当時、1回ずつ更新していくというようなことが3、4回あって、5回目からレギュラー化という。当初は夜中の時間、普通のタイムテーブルで全部埋まっていたものですから、夜中枠で。今ならいろいろと報告しないといけないと思うんですが、当時は、天下りの方ばかりだったので、全部その辺のOKは出たんでしょう。突然、深夜にそれだけ放送するといったことが、身内だけで全部済ませられたのも、その辺のいきさつがあるからかなと。当時の裏社会を暴いた本がありまして、電波監理局からどこの局へ何人下りたといった資料も結構、出回っていました。私は当時の本を集めるのが好きで、NHKの本とか、毎日放送では並河亮さん。後に日大の先生になった、民間放送で初めてのラジオドラマ「ジャズ物語」を制作し、その本（「ジャズ音楽」並河亮著、要書房、昭和28年発行）の最初に、新日本放送（現毎日放送）の話が出ていました。

——— そうですね。連続ドラマとして云々と書いています。

<リクエスト曲の電話殺到 1日で3000通話のときも>

井上氏 先ほど、7局の4321という電話番号が出たんですが、私はずっと住まいが大阪でして。家には電話がなく、祖父の家の壁掛け電話からかけましたが、30分ぐらい

かけて、電話局から返って来るのが、「つながりませんでした」という。あんまりしつこいで怒られてしまっただけからは、かけることをしなくなりました。多分、中学に入った頃で放送時間が、7時から9時になってから電話したんでしょうが、まさかその当時のことが、今の仕事につながっているとは思いませんでした。

「7・7電話リクエスト」というのが始まったのが、まだ週6日勤務の時代で、毎日、音楽が聞けて、仕事に携れるということでした。

「電話リクエスト」の中身は、リクエストが来ると、それを順番にかけるのかというと、そうではありませんでした。多いときは一日、3000通話といった数字があるんですが、それも一人が一日130通話かけてくるというケースもあります。家でかけると怒られるので、10円玉を持って公衆電話でかけるという。で、昔の電話なので、「0」を回すのは大変な作業というのか、時間がかかる。皆、手に炎症を起こしているような有様でした。「電話リクエスト」がこれだけ広まったというのも、特に神戸の場合、聞いていないと、学校へ行って友達と話が出来なくなるのが辛いというので、「電話リクエスト」を聞いた翌日に電話でメッセージを読んでもらったのをどうのこうの、それが話題になるということがあったからでしょう。従って、いまだに「電話リクエスト」のことを、ご存知の方が結構多いんです。

ラジオ関西には、在阪とか、中央の局でないものばかりが集まって連盟を組んだ「火曜会」というのがあります。その中の報告でこんなのがありました。

名古屋の放送局でも「電話リクエスト」をしたい。ラジオ関西でかけていた、ロイ・エルドリッジの「スターダスト」(前のテーマ)、と「Auf Wiederseh'n Sweetheart」(後ろのテーマ)を譲る、もしくは、貸してもらえないかというのです。しかし当時そのレコードはもうなかったんです。契約の関係で日本には入って来ない。SPだけが残っているというような状態で、ラジオ関西には、そのSPも割れてなくなっているようなときでした。

たまたまある番組で使ったものをよそでも同じような番組を作りたいから、それを貸してくれというような話があるというのは、それほど「電話リクエスト」と、そのテーマ音楽が一体になっていたのかなということですね。それとリクエスト曲は多いからかけるといったものではなくて、曲の並べ方(配曲)というのが曜日担当者の腕の見せどころなんです。飽きさせず、意外性があり、心地良い配列であるといったこと。よく言われていたのが、今のパナソニックがやっている「歌のない歌謡曲」なんていうのは、W型でやれという話がよく伝わってきて、速いのがあれば、遅いのをかけるとか。それをブロックでそういうのもっていくのか、1曲ずつやるのかという、そういう中で、最初に教わったのが、とにかく配曲に気を付けろということです。いかに曲を選んでいって、並べるか。それだけが「電話リクエスト」の持ち味。今度はその配曲の中でも、ある程度、割合があっ

て、あるアナウンサーの場合、カントリー&ウエスタンが得意なら、喋るときにもそういう曲が来ると熱が入るので、聞いているほうにしてみれば「この人のときは、この曲をリクエストすれば、かけてもらえる率が高いな」ということが分かるわけです。ジャズが好きなアナウンサーなら、ジャズを中心にリクエストが来たりというような具合です。私らペーパーのときは、頼まれて、選曲するときもその喋り手に全部合わせる。カントリー&ウエスタンの日は、こちらも出来るだけカントリー&ウエスタンをかけるようにするとか、ジャズの日にはジャズだし、シャンソンの日はシャンソンをちょっとかけるとか。先輩には、それぞれ得意分野があつて、何か質問があると教わるという。末広さんを始め、そういった専門分野を持った先輩が多かったので、教わって作るということはありません。

—— 井上さんのお宅の写真をみると、放送関係・音楽関係の資料、その後ろに図書センターのようなレコード・CDの移動棚があります。在職当時からいろんなものを残しておくというマニアでいらっしゃるんですか。

井上氏 小さいときからですね。一昨年、ラジオ関西が60周年を迎えたときに、34人ほどのアナウンサーが一週間ずつ、15分の番組、ベルトで15分を1人ずつ収録しました。そのときに、私が持っている全資料を持って、お話を伺ったんですが、その一式が全部どこかにいってしまいました。「電話リクエスト」のことが入ったこの資料だけが残っていました。

—— 歴史をザッと振り返っていただいたところで、クリスマス特番のときに井上さんがお書きになった資料を基に、あるいは伝説を基にお話を伺いたいんですが、このときには、午前1時頃から何時間ぐらいですか。

井上氏 4時間。

—— 4時間やってらっしゃって、このオープニングは、そのときから、「スターダスト」だったんですか。

井上氏 電話がもしかからなかったらいけないというのと、最初が大事だということで、末広さんが10曲ほど順番に決めておられた、その1曲目がたまたまロイ・エルドリッジの「スターダスト」だった。だから、エンディングとセットで最初から用意されていたんです。

—— それが案に相違して、どんどん電話がかかってきたわけですね。そのとき、電話

は何台ぐらいあったんですか。

井上氏 3台。3人ほどしか人がいなかった。それと夜中の1時というのと、ほとんど普通の社員は帰っています。だから、あらかじめ残っていてくれた人たちがやったようです。

——— すると、あまりアテにされなかったのかもしれないですね。

井上氏 そうですね。アルバイトの人もちよっと来ていたみたいで、後にOBCで放送部長になったり、わが社の社員になったりというような人がいました。

——— で、司会をされたのが。

井上氏 朝日放送のお勤めが長かった小山美智子さん。今もペンクラブに参加されたり、岸和田のコミュニティFM放送で、よくゲストとして出ておられて、今も元気でご活躍されています。

——— 今、おいくつぐらいですか。

井上氏 93歳ですか。

——— 今も現役で出ていらっしゃるわけですか。

井上氏 ええ、ちよくちよく。お喋りが好きなので、声がかかるとすぐに行かれるみたいです。小山さんも1週間分を録りました。入社試験を受けに来たときには、すでにお子さんがおられたが、「お子さんはいるんですか」と聞かれなかったんで、何も言わなかった。通ってしまってから言いましたって。そういうエピソードがあります。ですから、初代が小山美智子さん。後の朝日放送。二人目が玉井孝さん。この方も朝日放送。3代目は短かったんですが、乙川幸男さん。4代目が一番長かった斉藤ヒデオさん。後に毎日放送で「真珠の小箱」などをやっておられた。

——— 電話リクエストを受けるからには、結構、音源がなければ受けられませんよね。ラジオ関西ではどういったレコードを持っておられたんですか。

<エルビスやビートルズの新曲を東京より早く 洋楽のラジオ関西>

井上氏 ええ。一番古い棚には、レコード会社からのベスト盤というのも入っています。

当時、輸入盤が結構、多かったです。というのも、日本では、昭和 42、43 年まで契約のないレコード会社が結構あったので、そういったのをかけるのには、やはり輸入盤を買わないといけない。名前は聞いているけど、音が聞けないのを、リクエストすれば、聞けるということで、いまだに洋楽のラジオ関西と言われているのは、その辺のことです。

私は 39 年入社で、毎日、「電話リクエスト」の担当だったので、昼間の時間を利用して、大阪のレコード会社を回れという。今だと、毎日のようにレコード会社の人が会社を訪ねて来るのですが、当時はビクター、コロンビアあたりでも、大阪からは年 1 回、夏に挨拶に来る程度。当時、ビクターもコロンビアも神戸に販売所はあったが、宣伝部というのとはなかった。

私が各社を回って、新しく買ったものを持って帰るという。レコード会社が試聴会（新聞社とラジオ局、テレビ局の担当者がその月発売のレコード、いわゆる目玉商品を聴く会）を行っており、そこで、必要なものに印を付けて送ってもらうというシステムがある中で、その試聴会よりも早く頂こうというようなことで、各社を回っていたんです。ですから、エルビスやビートルズの新曲なんかは、大阪だけじゃなくて、東京とも張り合っていましたね。例えば月曜日、神戸では白藤丈二、東京では福田一郎（音楽評論家、1925 年～2003 年）と糸居五郎（ディスクジョッキー、1291 年～1984 年）と 3 人が結構、競い合い、何曲かは神戸が一番先にかけてたというようなこともありました。

いわゆるヒット曲に対しては取り合いみたいなのがあったんですが、ヒット曲というのは、リクエスト電話の大体 3 分の 1 ぐらいしかかからない。他はいわゆるスタンダードナンバーといわれるものがざっと 3 分の 1。それからムードミュージックであったり、映画音楽であったり、そういったいわゆる当時のムードミュージックのバランスを考えて、曲を並べていく。だから、ヒット曲に関しては毎日続けてかかることもあれば、映画音楽なんかでも、昨日良かったのもう 1 度今日もということでも続けてかかるということもあります。

電話リクエストノートには、毎日かかった曲名を書き付けていて、昨日何をかけたかというのを見ながら、次の日に順送りしていく。洋楽しかかけないとか、他の電話リクエスト番組もそうなんです、「帰ってきたヨッパライ」（昭和 40、41 年頃）をある曜日は絶対かけないし、ある曜日はそればかりかけるというようなことがありました。ちょうど「電話リクエスト」にレギュラーで来たことがありました、高崎一郎さん（パーソナリティー、1931 年～2013 年）がそのおいしいところ、著作権とかその辺に関するものをうまく持っていかれたようで、登録したのは高崎一郎さんになっているようです。

——— それはどういうことだったのですか。

井上氏 曲を作った人間はちゃんといるんですが、著作権協会に届けに行った人間が高崎一郎さんになったということです。

—— 著作権者になるわけですね。

井上氏 それほどのものではないんですが、つながりを持っていらしたっていう。

—— それから、1回目のクリスマス特番のときに、これほど大きな反響があったというのは、リスナーが、こんな番組は初めてだというような、何か驚きがあったとか、何か求めていた番組だったんでしょうかね。

井上氏 ただ、当時は、一家にラジオが1台の時代で、家族全員が同じ番組を聞くというスタイルでした。それまではNHKしか聞いていなくて、つい先日も「冗談音楽」なんていう番組を、再放送していました。それから「S盤アワー」「L盤アワー」「P盤アワー」のなかでは、「S盤アワー」が早かったんですが、そこで聞いた曲を聞きたい。その後の「ヒットパレード」もそうなんですが、大体10曲ぐらい順位が発表になっても、30分番組の中では全部かからなくて、フェイドアウトするということもしなかった。ベスト3は全曲かかっても、新曲も紹介しなければということで、ベスト10が全部聞けるというわけじゃない。ただ曲名は知っていて、もう1度聞きたいとなると「電話リクエスト」みたいに2時間あれば、聞く可能性が高くなるのです。

—— なるほど。この当時のラジオ関西の局舎が東海道線の列車の窓から見えたかなという記憶が微かにあるんです。例えば私の大先輩の松本暢章さんっていうラジオ関西から関西テレビに来られたアナウンサーの話とか、それから小山乃里子さんの番組の合間に海に行って泳いだのよ、なんていう話を聞いたりしたことがあります。海の側にあった局舎は何階建てだったんですか。

井上氏 一応、2階建てということだったんですが、平屋です。
それから、ラジオ関西から関西テレビへは、大異動のときには30人ほど出向しましたね。

—— ですよ。写真を拝見すると、あの小さな局から、日本で初めての電話リクエストが始まって、それを名番組にしていたというのは凄いことだと思います。レギュラー化するまでに、どんな時代があったんですか。

井上氏 昭和 27 年の 12 月に 1 回目があって、あくる年の 2 月にはもうレギュラー化しています。

——— そうですか。

井上氏 ですから、その評判が良かったためにすぐ取り込んだんですが、まだ夜の遅い時間ではあったわけですよ。

——— 昭和 28 年ですね。1953 年になりますか。

井上氏 はい。

——— そのときには、どうなんでしょう。電話 3 台ではちょっと足りませんよね。恐らくかなり体制を整えてから。

井上氏 そのときあたりから、もう 9 台には。

——— ああ、そうですか。

井上氏 はい。というのは、最初 3 台というのは、受け付ける人間が 3 人しかいなかったもので 3 台という。

——— 昭和 28 年にレギュラー化して、このときには“毎日”になったんですね。

井上氏 いえいえ。レギュラー化は毎土曜 1 回。それまでは月 1 回の予定でスタートしていたんですが、すぐ 28 年の 2 月にはレギュラー化。毎週土曜日ということでレギュラーになっています。

そのときはまだ「電話リクエスト」というタイトルではなかったんです。最初「クリスマス・イヴ・テレフォン・リクエスト」ということだったんですが、その後 2 回目からは「テレフォン・リクエスト CR ジュークボックス」という長い名前になっていまして。「電話リクエスト」になったのが、昭和 28 年の 9 月 6 日から。そのときもまだ小山さんでした。

——— 小山美智子さんですね。

井上氏 はい。その翌年、29年の10月に2代目として玉井さんが。「電話リクエスト」と名前が変わったときに、日曜日7時から9時までと一番長く続いたときのスタイルに定着したんです。

——— このときには日曜日の時代があったわけですね。

井上氏 私らは、その日曜日の時代に育っているといいますか。

三浦氏 当時、お聞きになった方はいらっしゃらないんですかね。

——— 「電リク」をお聞きになった方。はい。三浦さんが関わるのは、もうちょっと後になりますね。

三浦氏 私は1965年、昭和40年入社ですから。井上さんの1年後ですが、この1年がずいぶん大きいのです。私には収集癖もなければ、仕事が済めばすぐにパッパラパーですから。全くメモリーしかないんですけど、これも最近、当てになりません。今、話を聞きながら、へえと思っています。

井上氏 この一番長かったときには「モナの電話リクエスト」という名前が付いていました。このときのコマーシャルの原稿から全部ためていたのを、それも先日の紛失騒ぎでどこかへ行ってしまいました。

——— 時代の音楽の傾向として、やっぱり昭和27、28年ぐらいから、井上さんがお入りになる頃の間には、ずいぶん曲の変遷があったのでしょうか。

井上氏 一番変わったのはビートルズですね。
高校1年のとき、日本にエルビスが入ってきて、文化祭でエルビスの曲をステージで演奏したことがあります。

——— ということは、ギターを弾かれたとか、ピアノとか。

井上氏 私はピアノで。民放クラブの総会では何度か演奏させていただいております。

——— 学生時代から軽音でしたか

井上氏 はい。軽音楽部がラジオ関西の「電話リクエスト」に1年間出演するというチャ

ンスがありました。電通には関学の軽音楽部OBが結構いて、コマーシャルのほうを仕切っていたので。昭和38年、4年生のときに、1年間、「電話リクエスト」でリクエストした曲に応えるという形で、全部事前に録音は録っていたんですが、お喋りと曲と、且ついろんなバンドも出演していました。たまたま、そのときリーダーだったので、他のバンドのときにも付き合わされて、まだ就職試験も何も受けていないときに、会社のほうから「明日、願書持って来い」と言われて、持って行ったら、気が付くと、「電話リクエスト」を担当していたという。就職試験はたった1回だけしか受けていません。

—— かなり前から社員同様に出入りしておられたわけですね。

井上氏 そうですね。

—— それから「電話リクエスト」が、聴取者から電話が入って、放送されるまでに、どういう手順を踏むのか、具体的なお話をしていただければ、ありがたい。

<電話の受付嬢は女子大生が中心 大阪7台 神戸7台でリクエスト曲受ける>

井上氏 当初は6時30分に電話を受け付けて、7時から放送ということだったんですが、後に6時受付で7時放送開始、その1時間の間に大雑把な流れを作るという。

「電話リクエスト」も数やっていますと、もう頭の2、3曲選ぶと、その日の流れが全部作れてしまうというような感じでした。

レコードを引き出すときに、棚があって、カードケースがあって、そこで曲目を選ぶんですが、慣れて来ると、体の方が先にそのレコードを取りに行くんです。やっぱり好きな曲へ、好きなアルバムへ手が行ってしまうようなことにも。電話が一番盛んなときの「7・7」大阪7台、本社・須磨が7台というときには、6時になると一斉に電話が鳴り出す。

その受付嬢は、神戸の場合、学生アルバイトが多かった。大阪の場合はいわゆるOG（勤め帰りに来る）。食事もしないで来るので、よく担当Dは、ポケットマネーで近くのパン屋さんからパンを買ってプレゼントしていました。

三浦氏 それで結婚した人もかなりいるわけですよ。

井上氏 電話がかかってきて、まず聞くのは、住所と氏名とリクエスト曲名。当時は「どなたにお贈りになりますか」というプレゼント形式も取っていたので、メッセージを書く欄がありました。それを小さなカードに書いて、カード集めの人に渡す。すでにかかっている曲などは、「それは先ほどかかりました」というようなことで。

皆さんが最初から聞けるというわけではなくて、途中から聞く人のために、黒板にはその日かかる曲名を順番に書いていくのです。カード運びの係が、カードを集めて持って行く、レコード室のほうに持って行く係が、今度はレコード室で決まった曲をそこに行き行って書く。レコード室へカードを運んで来て、そこでまた曲順にカードを並べ、それをディレクターが見て曲を選んで、選んだ曲を今度はオンエアに持って行く。で、レコードは副調の方へ持って行って、カードのほうはアナウンサーのいるスタジオの中まで持って行く。そこで、カード運びが曲名を書いていきましたよね。

三浦氏 そうでしたね。

井上氏 曲名を書いて、その辺の詳しい話は後ほど、全部、三浦のほうから。そういったことで、受付の7人と、それからカード運びが1人。レコード回しという、それもアルバイトがやっていましたが、それからアナウンサーと。一人で喋る時期と、必ず二人になったという時期といろいろ。大阪が加わったときなどは、本社二人、大阪一人の喋り手がいたということです。

——— 大阪で電話を受けて、スタジオから「どんなリクエストが入りました。ナントカさんからナントカさんへ」みたいな、いわゆるアナウンスをする業務があったんですね。それを末広真樹子さんもやってらっしゃったんですか。

井上氏 日曜日。まだ同志社の学生だった頃でしたけど。

——— 先ほど、大阪のレコード会社回りをして、「電リク」番組に関わり始めたという話をお伺いしましたが、そもそもお好きな曲のジャンルというのはあったんですか。

井上氏 なかったですね。大学時代はジャズばかりでしたし。

——— いわゆるスタンダードジャズ。

井上氏 はい。ジャズはよく知っているというのか、知らされる時代。クラブではそういうことで。一家にラジオが一台。FM大阪で喋っておられたジャズ評論家栗村政昭さんの家が斜め向かいであつたりと。そういった環境で、戦後すぐから、そういう音楽には、親しんでいました。大阪の日赤と上之宮のちょうど間ぐらいに家が一時期あって、黒人が「ピアノ弾かせてくれ」と家の中に入って来て、小学生のときに黒人が弾くジャズを目の当たりにしました。

—— 進駐軍ですか。

<井上プロデューサー 小学生からピアノでジャズ演奏>

井上氏 進駐軍の拠点が今の大阪の日赤にありました。民間人立ち入り禁止みたいな。上宮高校が米軍の子弟の学校になっていて。ちょうどその中間に家があったので、もうチョコレートには不自由しなかったです。家の前に出たらもうすぐ、チョコレートとかネーブルとかそういったものを皆、プレゼントしてくれるというような場所でした。たまたまピアノを聞き付けた黒人が、目の前でブギとかそういったのを弾いてくれました。小学校 6 年のときに自習時間なんかがあると校長先生が、「井上、お前弾け」ということで、S盤の再現を授業の時間の間、全曲弾きました。当時、譜面も何もなかったので、全部聞き覚えで演奏出来たんですね。

—— 帆足まり子さん（ラテン歌手、1932 年～2003 年）はいなかったわけですね。

井上氏 後ほどお会いして、サインをもらったりしました。ですから、曲の隔ては何もなしで、ラテンから何から、何でも好きでした。

—— じゃあ、「電話リクエスト」を担当するべくして。

井上氏 後から思えば、そうですね。

—— 27 年に、電話をして自分の曲がかかるというのは、リスナーにとっても随分、新しい体験だったと思うんですね。その当時のリスナーとしては、放送局を相手にしているみたいな気持ちがあったんでしょうかね。

井上氏 じゃなかったですね。受け付けの人のレベルなんです。かけてくる人は、リクエストを受け付けてくれる人が対象になるので、結構、話を長くしてしまう人がいるんですね。受け付ける人も、話しかけられると話し込んでしまうタイプの人っていて、それで結婚された人もいます。

—— ええ。リスナーとオペレーターが。へえ。

井上氏 リスナー同士、上手くつながって結婚したという人もいます。そういう人たちの結婚式には受付嬢も参加していたという話を聞いたことがありますから、結構、いろいろとつながりがあったんですね。

—— リスナー同士というのは、どうしてつながったんですか。

井上氏 誰々さんというようなことで、「今度、いついつ、何々の、催し物がありますね」とか言うと偶然なんでしょうが、それで会って話が。それと若い人たちにとって、当時、遊ぶものが少なかったので、今よりもっと、偶然のつながりが多かったのではないか。同じ仲間というんでしょうね。

—— それから、この「ラジオ・デイズ」の解説にも書いてあるんですが、大橋巨泉とかどなたかが出演された。これには司会と書いてありますが、そうではないんですかね。後々、結構、著名な方が出演しているんですよ。

井上氏 いわゆるマスター・オブ・セレモニーというのか、メインで仕切っておられるという。

三浦氏 「電リク」の担当者ですよ。パーソナリティーというか。

井上氏 ですから、アナウンサーの場合もあるし、そういうタレントさんの場合もありますが、仕事としては同じ役割です。

—— じゃあ番組を仕切るのは、例えばどんな方がいらっしやいましたか。

井上氏 東京からのタレントでは、いソノてルヲ。湯川れい子。先ほどの高崎一郎もいましたし、福田一郎、八木誠。彼は、最初のラジオ出演が「電話リクエスト」だったもので、何かあると、本に書かれていたようですね。

—— アナウンサーは斉藤さんが長くやっていたらっしやった。

井上氏 そうです。斉藤ヒデオさんが結構。

—— 「モナの電話リクエスト」で、末広光夫でというのを、うちの家内は強く印象付けて覚えているみたいですが、どれぐらいやっていたらっしやいましたか。

井上氏 いや、裏方でも、モナと末広さんにつながりはなかったです。「電話リクエスト」が初めての末広さんの番組出演だったものですから、「末広さん ラジオで登場」というようなニュースにはなっていたんですが。

—— ずっと裏方で選曲をしていらっしゃりながら、あるときにパーソナリティーとして・・・

井上氏 登場されたという。

—— いわゆる、ディレクターの腕の見せ所ですが、「今日は上手くいったな」というのは、どんな風なときだったのですか。

井上氏 今日はこんな曲がかかるといいなと、あらかじめ選んでおいた曲にリクエストがポンポン来ると、してやったりと思いますよね。それと馬鹿なことをしたので覚えているのが、11月15日の七五三の日に、セプテット（七重奏）からクインテット（五重奏）からトリオ（三重奏）というようなのを順番にポンポンと頭からかけて。

—— 七、五、三と。

井上氏 はい。もちろん曲はちゃんと配列して、この感じで配列して。一切、誰にも言わずに。すると、「七・五・三で遊びましたね」というのが、ポンと来るわけですよね。

—— リスナーから。

井上氏 ええ。トリオともそんなもの何も書かずに、曲名だけですからね。そういうのが来ると、楽しいなという。表には出さないで、裏方で感じ取ってもらえる遊びを、いろいろ、そうやって遊んでいましたね。

—— そうですね。それともう一つ大事なことは、ディレクターとパーソナリティーという司会の方、進行される方の息というのがあるでしょうね。息が合う、合わないというか。

井上氏 Dとしては、司会者の方に合わせるという、いかに合わせるかというのが、腕の見せ所だとは思いますが。

—— と、謙虚におっしゃっている、その辺りを。三浦さん、ずっと井上さんは合わせておられたようですが。

井上氏 あんまり一緒には・・・。

—— やっていないんですか。

<「電リク」専用『4321 番』が安否情報の窓口に 阪神淡路大震災で役立つ>

三浦氏 井上さんとは、退職してからのコンビなんです。そんなにディレクターがたくさんいるわけじゃないのに、これは巡り合わせなんでしょうね。

季節感をととても大事にする番組でしたね。ですから、2月14日のバレンタインデーは昭和40年当時もう盛んで、番組でも取り上げるし、ディレクターなんかは、受付の女子大生たちからいっぱいチョコレートをもらっていました。それから、クリスマスのときも、実際に番組中にシャンパンを抜くわけですよ。もう天井にスパーン！その音が入っても構わないということで、シュワシュワシュワってやってきました。スタジオは飲食厳禁の神聖な場ですが、大橋巨泉さんがこれを破りましてね。あの方、お酒飲めないんだけど甘党で、レコードがかかり出したら、ミカンなんかむいて、スタジオでばりばり食ってるわけですよ。さすがの怖い技術さんも、「巨泉さんならしょうがねえや」。これ以後、われわれ、社員がやっても誰も何も言わなくなりました。

そういう節目、イースターとか、要するにアメリカのそういうお祭りが番組に反映されましたね。

ついでに申しますと、7局の4321、まあ20年前の大震災のときには、731の4321だったんですが、その電話番号がラジオ関西のリスナーの方には刷り込まれていたんですね。だから、地震がちょっと収まった、午前8時前後から社内の電話が全部鳴るわけですよ。「私、何区の誰々です。生きているからラジオで言うてちょうだい」という、安否情報ですね。「電話したら、ラジ関には誰か生きてる人間がいてはると思って電話しました」と。それほど人は、人が恋しい生き物なんだなと思いましたね。まもなく震災20年になりますけれど、「電リク」がまだ生きていたということですね。

—— さっき、「電リク」がやりたくてと言われましたが、「電リク」はどんな状況で聞いておられたんですか。

三浦氏 僕は高校まで尾道で育ちましてね、尾道は千光寺山にNHKのJODPがあって、周波数の関係で大阪の新日本放送（現毎日放送）が入りにくいんです。東京・文化放送（JOQR）はなぜか入るので、ずっと聞いていました。ですから、ラジオ神戸のバタ臭い放送と当時、QRの新着映画紹介があったりする、いわゆる洋

楽番組、これを鉛筆舐めながら、カタカナで曲名を書くんです。周りが皆「お富さん」なんか歌っているのに。自分で組み立てたマジックアイ付きの、5球スーパーで聞けるようになった。それまでウチにあった並四のラジオはNHKしか入らなかったんです。それを自分の部屋でこっそりレシーバーを付けて聞いたりしていました。その頃が斉藤ヒデオさんあたりなんです。とってもロマンチックで「ああ、神戸、雨降り出したんか」と思って、番組が終わる頃に、「濡れたプロムナードのなんとかかんとかで、若い二人の後ろ姿を見ながら、今夜はこの辺で」とか言われると、「大人になったら神戸に行こう」と思った。そんな世界でした。

——— 大学は京都でしたよね。

三浦氏 はい。この会の八木さんがクラブの先輩ですが、僕は、同志社学生放送局では暗いほうの部で、学内を這いずり回ってニュースを取材して書いていました。アナウンスじゃなかったんです。報道のほうなんです。

<最終面接で「電リク」やりたいと訴える 三浦アナ 入社後まず報道記者>

三浦氏 ラジオ関西を受けるに当たっては、制作か迷ったんですが、やっぱりこの際、自分で喋りたいなあと思って。他社も受けたところが、結局、数社しか最終的な連絡をもらえなかった。

小山乃里子も同期なんです。ラジオ関西（社長は田中寛治神戸新聞社長が兼ねる）の最終面接で、江戸っ子の面白い専務の青木さんから（実質、会社を取り仕切る）「おお、てめえ、勉強なんかしてないんだろ」といきなり言われまして、総務部長と放送部長に「こいつ落とせ」と。それで「落とさないでください」。「だって、お前、勉強もしてねえ。取り柄がねえじゃないか」なんて江戸弁で言われましたが、「とにかく電リクがやりたいんです」「そんなに電リクが好きか」「とにかく電リクやりたいんです」それで入れてもらった。あえて申しますと、昭和40年入社というのは、東京オリンピックの後で、各社そうなんですけども、ディレクターもアナウンサーもスポーツの方しか採らない。特にナイター新時代ですから、野球喋れる、野球に明るい人しか採らない。まさに隙間なんですよね。失う物が何もないという。

いろんな先輩に出会ったが、関西テレビに行かれた松本さんのあの競馬の静かだけれど、穏健な喋り、いまだに憧れています。私の先生は、松本暢章さんなんです。

——— 私は、野球でしごかれましたけどね。

三浦氏 なるほど。

—— 入社されて、どんな仕事から入ったんですか。

三浦氏 はい。いきなり、報道取材に行きました。当時は、長田のケミカル工場の火事がよくあって、消防の一報が入ると、すぐ、電池 20 本ぐらい入った重いデンスケを持って。そういうので最初の 1 年間で仏さんというのは、いろんな種類を全部見せてもらいました。取材に行く、原稿を書く、自分で読む場合もあるし、他の方に読んでもらう場合もあります。それで、阪神・淡路大震災後、NHK神戸の方と一緒に、仕事した際、「NHK大変なんですよ。この震災後は、アナウンサーが取材して記事書いたりで、大変なんです」「それは大変ですね。私は入社してすぐやっていますよ」と大笑いしました。公開放送の場合も、ディレクターも、アナウンサーも一張羅を着てステージをやった後、お客さんがはけると、ジャンパーに着替えて、配線（ケーブル）の撤収から全部手伝うんです。入社してすぐに一人 2 役 3 役でしたね。

—— やっぱり音楽番組をやりたいなというお気持ちは。

<仮眠時間惜しみ 深夜のレコード室でレコード聴きリスト作る>

三浦氏 それはありましたね。週に 2 回泊まりがあって、夕方 6 時に入って、あくる日、10 時まで。当時、午前 1 時に放送終了して、朝 5 時の開始まで 4 時間のブランクは、仮眠時間でしたが、寝るなんてもったいないですからね、レコード室に入って、棚の 1 番からメモを取りながら、聞いたのがいまだに役に立っています。

—— 憧れの音楽番組を担当したのはいつ頃ですか。

三浦氏 「電リク」は割に早くにやらせていただいた。他にも、井上さんなんか言い出しっぺなんですけど、東京の行方さんとか、小川さんといった音楽評論家、あるいはオーディオ評論家を新幹線が出来たおかげで、神戸に招いて、実験的な音楽番組を展開しました。例えば、今ヒットしているこの音楽から、この音域を抜いたらどんな音楽になるかとか、あるいはフォー・フレッシュメンというオープンハーモニーが素晴らしいアメリカの男性コーラス 4 人組がいるんですが、あれを一人ずつ歌わせたらどうだろうかというので、同志社のタイム・ファイブに、各パートを歌ってもらったら、全くバラバラの音なんだけど、それが集まると、一つの素晴らしいハーモニーになるなんてことを、いろいろと。ほとんど洋楽系の音楽番組を定年までやらせてもらいました。

—— 「電リク」に関わったのはいつ頃ですか。

三浦氏 入社が1965年で、最初は66年です。7月に1か月間、末広さんがアメリカへ行かれまして、このとき、担当のディレクターだった内海元さんに厳しく、躰られました。例えば、「今日もたくさん頂きましたんで最初のカードから読みます」なんて言うと、音楽が流れている間に、「ご紹介しますと言わなきゃダメでしょ」と。リスナーを大事にしなきゃいけないということをいまだに言われ続けています。

—— 入社して、まだ間がないときは、学生として聞いている側と、放送する側というのは、本当は違うんだよというのはなかなか分かりませんか。僕なんかもやっぱり視聴者に対して、特にテレビの場合はマンツーマンではなく、1人対マスになりますので、そういう言い方はちょっと出来ませんが。ラジオの場合、人対人という感覚というのはたくさん味わわれたでしょうね。

三浦氏 そうですね。実は、宝塚と姫路のコミュニティFMでもやらせてもらっているんですが、ラジオ関西よりも、もっと生々しいというか、「これ三浦さんかけて」ってリスナーがCDを持って来るんですよ。「よっしゃ。次回かけるから預かるよ」と、まさにパーソナルコミュニケーションというのですかね。

—— 全曜日になったのは、井上さん、いつですか。

井上氏 昭和38年の終わり。1963年ですね。

—— 月～土ではなくて、毎日7日間やっていたんですね。

<第1回民放祭番組コンクールで「電話リクエスト」が全国2位>

井上氏 月～日まで。週7日のために、「7・7」の7は7曜日という。さっき言い忘れていたのですが、この「電話リクエスト」は昭和28年の第1回民放祭番組コンクール関西地区で第1位、全国大会で2位を獲っています。

それと割に早くに二元中継をしたり、昭和33年には、サンケイホールから北海道・文化・山陽・中国・大分、この六元中継をしたりしました。

—— いわゆる全国ネットですね。

井上氏 そうですね。斉藤ヒデオさんがデビューして間なしに、この全国放送になった。

これもそのときの役員が、とにかく斉藤ヒデオに、これをやらせたという。

——— これは日にち限定でおやりになったのですか。

井上氏 1回だけ。サンケイホールからの中継ですから。

——— そうすると、結構、全国からリクエストが来たわけですよね。イベントとしておやりになったのですか。

井上氏 はい。細かいことは伝わってないんですが、当時はFAXとか何かでといったものがほとんどない時代なので、あらかじめ全部決めてやってたんじゃないかな。各局からある程度はまとまって報告があるでしょうけど、まあ1放送局1曲ぐらいの取り上げで間に合わせたんじゃないかなとは思いますが。

——— それから1979年に、献血募集をされたと伺いました。

井上氏 あれは奥田博之さんのときですよ。血液が足りないと、番組で紹介したら、病院に人が大勢集まったという。その新聞記事を探したのですが、ちょっと見当たらず。

——— 「何型の血液が足りないので、どこそこの病院に行ってください」と。

井上氏 はい。直接病院に行っていて、あくる日には新聞に載る。

——— そのリスナー・聴取者と直で話をすることはないんですよね。

三浦氏 イベントがなければ、直に話をすることはありませんね。

——— なるほど。

——— 電話をオンエアするということはなかったんですか。

三浦氏 はい。電話をそのまま乗せるということはなかった。この部屋より一回り小さい部屋で、まさにこのような感じで電話が両方にありました。私が入った頃、電話を取る女性は全員、神戸女学院の人たちだったので、「へえ、敷居が高いんだなあ」と思いました。私が担当するようになってからは、

海星だとかいろんな女子大から。で、電話を取って、それを集計する係がいました。黒板がそういう風にあって、そこに選曲が決まったら、カードを運んでいる人が書いていくわけです。電話を取っている人がそれを見ながら「ああ、それ、さっきかかったから、別の曲になさったら」みたいなことでやっていた。受け付けたカードは、別の部屋に曲目ごとにカルタのように並べて、それを見てディレクターが「じゃあ次、これいこうか」とレコード室の棚からサッと引っ張り出す。あれは職人技！凄いなと思いました。アナウンサーは、そういう隠れた苦労を全く知らなくて、喋っていればいいわけでした。

—— ハガキでいろいろとリクエストがあったんでしょう。

三浦氏 ハガキは使わなかったですね。

—— 電話とリクエストを結びつけたのは画期的でしょう。電話とハガキではどこがどう違うんですか。

井上氏 やっぱりリアルタイムでしょうね。当日寒かったら、「外は寒いよ」というリクエストがポンと来る。雨が降っていたら雨の曲「悲しき雨音」とかそういった曲がズラリと揃うという。ハガキではそうはいきませんからね。それと今日あったことを、明日友達に伝えたいという、やっぱりリアルタイムに近い働きというのか。

三浦氏 「残業、ご苦労様」といった、新婚さんのホットなメッセージとか。

井上氏 「遅くなります」というのもあったり。

三浦氏 楽しかったですね。

井上氏 大阪の場合は、受付嬢が残業で遅くなったりというときは、ディレクターも空いている電話を取ったりするんですね。すると、いつも馴染みの人の声が直接聞ける。その人の名前なんか、いまだに思い出されますね。それと、末広さんがよくやっておられたのは、ある喫茶店を借りて、ファンの集いと称して、そこにリクエストをかけてくるファンを集めて、音楽を聞かせながらパーティーをするという。すると、かけてくる方々とのつながりが出来る。毎月 1 回、三宮でやったりしていましたね。

—— 曲は丸々、1 曲かけられるんですか。それとも・・・

井上氏 必ず曲の終わりまで。私らが習ったのは、イントロも大事だけど、エンディングも大事だということ。そこでどれだけ皆、苦勞しているか、それを聞かせるのが音楽だという。ですから、今、三浦と一緒にやっている番組も、必ず曲は最後までかける。最近の曲は5分とか6分とか結構、あるんですが、場所を選んで、できるだけ完奏するようにはしています。

<感受性の強いときに聞いた音楽は人の一生を支配する>

井上氏 何かあるとよく言うんですが、いソノでルヲさんに教えてもらったのは、「初恋の音楽がある」ということなんです。それは感受性の強いときに聞いていた音楽は、その人の一生を支配するものだという。私らの頃はロックンロールであるとか、ジャズもファンキーであるとかというのは、いまだによく聞きます。感受性の強いときにインプットされたものは、60歳になっても70歳になってもやっぱり出て来るのかなという。その頃にクラシックをよく聞いていた人は、今もやっぱり、ベースにはクラシックがちゃんとあるということなんです。

三浦氏 年齢的には、先日のUSJのレコードコンサートの場合も、男女ともに40代から70代ぐらいまで幅広いんですが、一番多いのは60歳前後のところだと思うんですよ。

音源に限られますから、リストを作って行って、「この中から選んでください」みたいなことをやるんですが、まさに自分の青春時代をね。

そういう集いに来る方たちで、グループっていうかお友達がまた出来る。ですから井上さんの「電リク」をやった頃のグループじゃなくて、その頃も聞いていたよという方も含めてね。あるいは最近の深夜の「名曲ラジオ」という番組を聞き出してから、ラジ関のファンになったという方、つまり年齢的にはかなり開きがあるんですが。その方たちが一緒に電車で帰って行くということがあるんです。だからラジオというのはやっぱり、テレビとは違う何かがあるんだなあと思いますね。しかもFMじゃなくて、中波でね。実際にLPレコード、シングルレコード、いまだにレコードはよく使いますから、音、シャーシャーいってるわけですよ。それでも、許していただけるというか、「それがいい」という言葉はありがたいですね。

——— 最後にお伺いしますが、その当時、お二人ともアナウンサーあるいは、ディレクターの立場で、流行っている曲、ウケている曲というものに関して、かなり敏感にいろんなリサーチをしたりしておられましたか。

三浦氏 当時はもちろんそうでしたね。

——— そういった情報源はやっぱり雑誌とか。

三浦氏 ええ。私の場合は月刊誌です。ジャズは当時、「スイングジャーナル」。あるいはいくつかのポピュラー系統の雑誌もありました。

——— 「ミュージック・ライフ」とか、「ポップ・・・」とかありましたよね。

三浦氏 まさにそうですよね。編集の星加ルミ子さんとかね。話はちょっと戻りますが、ビートルズが、登場して、あれは東芝 EMI だったんです。日本の担当のプロデューサーが、脛まであるようなコートを翻して、今、ロンドンから帰ったよと。

井上氏 真っ白なブーツ。

三浦氏 東京の方なのに、東京よりも先に神戸に来て、今夜の「電リク」のために、初版のプレス持って来たよと言うんです。シングル盤、白レーベルのものとかね。それが間に合わないと、キングなんかでは、イタリアのカンツォーネ、「サンレモ音楽祭で決まったよ。これまだレコードになってないから」って、テープで持って来られるんです。まず神戸に来て、ラジ関で放送しといてから、東京に帰られるという。そういうのがずっと 60 年代、続くんですね。あの頃はやっぱり、ラジオ関西は、音楽業界では随分、評価されているんだなと思って嬉しかったですよ。先輩たちが営々と作られた一つの歴史だったんですね。

——— そういう時代というのは、何年から何年ごろまでですか。

三浦氏 私が入社した 1965 年から、10 年間ぐらいでしょうかね。ただ「電リク」というのは厳密に言うと、終了じゃないんです。今やっている「名曲ラジオ」のような感じで、要するに電リク世代フォロワーバージョンのような番組を、また担当させてもらってましたんでね。これ線引きって難しいですね。

井上氏 そうですね、いわゆる昔スタイルの「電話リクエスト」が終わったのが 1970 年、昭和 45 年ぐらいまでですね。その後は、もっと今のカラーに近いもの、というのは、昔の「電話リクエスト」ではヒット曲であっても、もう今はスタンダードとして残っているような名曲ばかりだったわけですね。時代がどうのこうのというより、確実に古い時代のほうが良い曲が多かったっていう。シナトラとか、ペ

リー・コモとか、トニー・ベネットと今でこそスタンダードになっているが、当時はそのときのヒット曲ですから。

—— 地球上の素晴らしいメロディーは、60年代、70年代に、出尽くしてしまったと言う人もいますけどね。

井上氏 それに近いと思いますね。

—— さっきノートがあるとおっしゃいましたが、「電リク」のベスト10とか、ベスト20といった集計みたいなものはないんですか。

井上氏 一時期、やりました。周年記念のリクエスト番組とそのときの「電話リクエスト」を重ねて実施したときがありましたが、たしか1位は「テネシーワルツ」でした。

—— ああ、そうですか。パティ・ペイジの。

井上氏 というよりも、曲だけで。もちろんパティ・ペイジが下敷きにあるとは思いますが。

—— なるほどね。きっと永遠の名曲ということなのでしょうね。
さっき三浦さんからは、ラジオというメディアはというお話があったんですけど、井上さんはそれについてどんな風を感じていらっしゃるのか。率直に語っていただければと思います。

<ラジオは“良い声”がいのち>

井上氏 この前も「今のラジオをどう思うか」について話したんですが、とにかくお喋りのテンポが速すぎる。年を取ったからそう思うんじゃないくて、総体にやっぱり速くなっているのと、それから昔、ラジオは、声の質で選んでいたかなと思います。番組の内容とかそういったものよりも、良い声で喋って、それが結構、内容とマッチするという。MBSラジオでよくやっておられた夜中の番組。「歌・・・」とか、女優さんで名前が出て来ない。

—— 毎日、違う人たちが喋っている番組ですか。

井上氏 ええ、違う人たちで、12時頃からやっている番組。大村麻梨子さんとか、帆足まり子さんといった、声の良さといったものが、全部つながったものを聞いていた

かな。最近は声の質について何も言わなくなってしまいました。やっぱりラジオの完成品というのは、声の質も音楽の種類も、出来上がった上質のものを聞きたいものですね。今は、素人集団みたいなのが、結構、多い。ですから、本当のプロが喋ったり、曲を選んだりするという番組が、やっぱりもう一度甦って欲しいなと思いますね。

—— 「電話リクエスト」に一番長く携わった井上さんからご覧になって、あの番組は一体、何だったんだと、どんな風に思っているのでしょうか。

井上氏 過去のものとはしたくないんですけど、今もう絶対「電話リクエスト」なんて出来ないわけですね。メディアが変わってしまっているんで、メールをもらったり何かしても、こんな大きなもので来ますね。時間かけて今やっている番組なんていうのは、時間があるから全部読めてどうのこうのという。全然、カードだけがポンと来て、それで対応出来るという時代じゃないんで。かえてメディアが速くなってる代わりに、遅くなる部分も出て来ているかなという。ただ、楽しみたい音楽、楽しみたい声、そういったのが本当に欲しいな。そういうのを作り上げていきたいなと思いますね

—— 最後にお二人の一番好きな曲は。三浦さんはご自分のベスト1は。

三浦氏 よくそれを言われるんですが、本当に節操がないというか、何でもいいんです。

—— いわゆるオールディーズという風にくぐられますけれども、僕はその時代の曲が大好きで、いまだにいろんな曲を家でも聞いているんですが、あまりオールディーズと言って欲しくないなという感じはするんですね。

三浦氏 きっと仕事として皆さんに伝え続けるのが、僕たちの役目だろうなと思うんですよ。ラジオ関西10万枚のレコードが、埃を被って寝てちゃいけないんで、あれを何とか電波に乗せなきゃいけないなと思っているんです。だからクラシックだって、出来たときは、流行歌だったわけですから。いわゆるオールディーズだとかそういうものの中からエヴァーグリーンというのか、おそらくもう少し時間が経てば、クラシックだ、ポップスだっていう境目もなくなるのかなと思ったりもします。

—— 1970年頃に古い形での「電リク」はなくなるわけですね。それはどういう意味で、どういうことでなくなったんですか。

井上氏 「ナマナマ大放送」という若い人たちを生で扱う音楽を含むベルト番組が出来て、ホールに人を集めて、2か月に、1回は生放送。そこで抽選をしてハワイ旅行をプレゼントみたいなことで若い人たちを集めていくという。「電リク」なんていうのは幅が広がったんですけど、ともかくヤングを集めようという時代の流れがあって。ヤング対象の番組が、その後、いくつもワイド番組で続いていくわけですよ。それで「7・7電話リクエスト」という週7日の番組が終わって、若者対象の番組に変わった。それと同時に今までのファンは逃げて行ったというのか、層が変わってしまったということですね。

——— いまだにお二人は番組をお作りになっいらっしゃいますが、これはラジオ関西本社からの要望でいわゆるジャズとかポピュラー番組を作ってもらっしやるわけですか。そういう会社としての要望があるというのは、どういう理由、やっぱり、そういうラジオの層がいるんだよということなんでしょうか。

井上氏 一方では「ラジオ深夜便」(NHK) もありますしね、それと営業が営業活動に行っても、かつて「電話リクエスト」を聞いていたという話が出て来るわけですよ。真夜中は、捨て時間と言えれば捨て時間ですし、こういった二人がたまたま残っているわけです。私の場合、「名曲ラジオ」は4年か5年ですよ。

三浦氏 5年ですね。

井上氏 それまでに私も退職して、すぐに2時間とか2時間30分のジャズ番組は、スポンサー付きの別の番組を担当していたりしていました。その続きで、いろいろ、また新しいのをやった。宗教番組とか、里親を探す番組とか、制作会社にお願ひしにくい番組を全部こっちがいまだに引き受けている。手前味噌になりますが、去年、岡山で民放クラブの大会があり、関西代表ということで、また山陽放送が仕切りだったんで、朝日のOB、サンテレビのOB、そして私とバンドが乗り込んで、PRをして帰って来ました。すると全国版の民放クラブの新聞に1ページ、たしか載っていたと思うんですが。

三浦氏 月曜午前1時の「名曲ラジオ」という番組も、水曜夜7時から2時間のジャズ専門のものも二人で、やらせてもらっている。「ジャズライブコレクション」は拍手が入ったLPレコードを中心に、やっているんですけど、どっちもサスプロなんですよ。スポンサーがないんですよ。これが、PTではあるんですけどね、だから冠のない番組をやるというのは今のラジオ関西のほとんどが、後輩の連中だし、

社長は今も神戸新聞からの方なんです、よくやらせてくれているなあと思
っているわけですよ。

つまり「電リク」の財産というか、そういうものを神戸の地で、何とかキープし
なきゃいけない使命感というのが、今の経営スタッフにもある。そのことを市民
の皆さんも受け取ってくれているのかなあと思っています。ただ、「俺たち、もう
長くないよね。この後、どうするのかね」って、いつも話をするんですが、今の
ラジ関にはこういう番組をやろうと思う、あるいは出来るというスタッフがいな
いんですよ。各局とも、そうなんでしょう。

NHKはさすがに層が厚くて、ひょっとすると外部の方が選曲したり、台本を作った
りしているのかなあと思ったりもします。さっきも申しました通り、昭和40年頃、
東京オリンピックの後、スポーツ全盛の時代がずっと続くわけですから。競馬も
とても華やかだったし。そんな中で、各局には、こういう音楽番組が出来るスタ
ッフがほとんどいらっしやらないんじゃないのかなと。

—— やるスタッフがいなくても、今、「電リク」を仮に復活させるとしたら、あま
り意味がありませんか。

井上氏 システムとして、やっぱりしにくいでしょうね。

—— その一番やりにくい理由は何ですか。

井上氏 本当はやっぱり良い音で聞いて欲しい。今はスマホとかそういったので、“ながら”
でも、全然違う“ながら”になってしまっているんで、その辺は、経験がないだ
けに把握出来ていないんですよ。一応、こっちもiPodという中に「電話リ
クエスト」でかかるような曲は数千曲、放り込んではいますけど、それとスピー
カーから流れてくる音楽とは味が違うんです。

—— 今、スピーカーで音楽を聞くという、ラジオを聞く人は本当にいないわけ・・・

井上氏 少ないですね。それとデジタルスピーカーで聞く人が多くて、音楽を聞いても（身
心が）休まらないんですよ。結構、そういう研究はされているみたいで、血流
から何から全部変わってきますよというデータが最近出ていて。先ほど言ってい
た三菱のダイヤトーンなんかで聞くと、血液の流れがものすごく良くなるという。
結構、そういうことに気付き出して、やっているんですが、商品化されてくるの
は、安いせいもあるんでしょうけど、デジタルものばかりで。音域に関しては三
菱とは同じ音域を出しているんですが、聞いて、心が休まるとかそういったもの

では全然なくて、あれは音楽であって音楽でないものを聞かされていると思いませんね。

——— それと一番大事なことだと思うんですが、さっき三浦さんの方から、エヴァーグリーンという言葉が出ましたが、それに匹敵するような、長い寿命を持った良い曲というのがないんですよね。なくなっている時代なんです。ですから、リクエスト曲も、若い人の場合、「これが好き」「このアーティストが好き」というのはあるかもしれませんが、60年代、70年代、80年代で長く1位を保った曲が、今はないんじゃないかなあという気がします。

<変わるメディア環境の中で「中波ラジオのこれから」>

井上氏 それとマスを使わないでも、例えばFacebookとかそういうので友達とやり取りしながら、「あの曲いいね」と言ったら、すぐ探している曲が出て来るわけですから。聞きたい曲がラジオ局にしかないという状況ではない。それと言葉のやりとりも別の手段で即座に、知らない相手とすぐにつながるという。だから、ラジオの存在そのものが必要とされているのかどうか。

——— 放送局に頼まなくても、自分で・・・

井上氏 何でも処理が出来る。だからラジオそのものは、今、盛んにやっている、震災用のものであるとか。で、FM局の方がおられたらあれなんです、中波の大事さという点での研究も最近進んでいます。人には聞いていても聞こえていないという状態があるという研究が結構、進んでいて。聞いてはいるんだが、聞こえていない。ところが、いつも聞いているなじみの声、特にAMの声で、「今外に出たら危ないですから、2階に上がってください」と言うと、それを聞き留めやすい状態になっているという。

これからの震災番組も、その辺が結構、問われているみたいです。NHKの中波では、そういうなじんだ声を、NHKを通して民放の人にも聞いてもらおうというようなことをやっています。その研究と「オレオレ詐欺」の電話の研究とが、またつながってきているということで、中波のあり方も、そのような目線で見直して行かないと先がないのではないかと。私どもでも今、震災、特に20周年を迎えるに当たり、そういう取り組みはやっているようです。

「オレオレ詐欺」の場合もひと言で言うと、反射運動なんですよ。危機感を受けると、普通の考えるルートではなくて、反射神経の方のルートに入ってしまうので、思考は一切通らなくなるんです。普段からいろいろと練習したり、訓練したりしていても、思考関係で訓練しているので、そこに「オレオレ詐欺」がボンと

来て反応してしまうと、普段の訓練とか何か全部ボツになって、その反射神経だけで受け答えするということになる。従って、何でも「はい」って答えてしまうことになるんですね。その元のところが、もっと研究されないと、いくら思考関係を開発してもつながらないという。そういう研究の本も、結構、出てきました。私は本を集めるのが好きなので、今、その辺の資料は全部、総務へ行ってますけど。

——— 終わりのほうは、非常に幅広いお話になりました。今日は井上正之助さんと三浦紘朗さんにお越しいただきました。開局の年から始まったラジオ関西のあの名番組には、いまだにその精神が脈々と続いている、気持ちが残っているというのは、やっぱりうらやましく、うまく長くつながっていけばいいなと思います。本当に今日はどうもありがとうございました。

以上